様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０１９９６

研究課題名（和文）田辺哲学の複眼的・動態的な方法論による総合的研究と国際連携体制による展開の試み

研究課題名（英文）An integral research on the philosophy of Tanabe Hajime with a dynamic and multifaceted approach and its development through the international collaborations

研究代表者
杉村　靖彦（Sugimura, Yasuhiko）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：２０３０３７９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：京都学派の哲学の研究が国内外で急速に盛んになってきた中で、田辺元の哲学の研究は、基礎的な研究と外国語への翻訳の双方に関して、なおきわめて貧弱な状況にある。そのことを踏まえて、本研究では、田辺哲学の複雑な成り立ちと多面的な展開を精密な解明と統合的な理解を企図し、そのつどの成果を国内外の哲学研究者たちに向けて発信してきた。また、フランス語圏の研究者たちとの連携体制を生かし、彼らとの議論をフィードバックさせて研究を進めてきた。加えて、そうした連携体制をさらに拡大深化するべく、田辺のハイデガー論３編の仏訳を進め、完成に漕ぎつけることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
田辺哲学は、その独特の用語と濃密な文体に阻まれて、これまで十分に研究されてこなかったが、同時代のあらゆる思想を取り込み独自に結晶化させたその世界は、思想史的な関心の的になるだけでなく、今日に生かしうる独創的な着想の数々を蔵している。本研究は、この田辺哲学研究を国際的な連携体制において推進するための土台作りを目指したものであり、国内の研究者はもとより、フランス語圏を中心とする海外の研究者からも多大な関心が寄せられてきた。こうした研究は、「日本哲学」を特定の文化圏や言語圏に閉じたものとせずに世界の哲学の共有財産にしていくための一歩であり、その点で大きな学術的・社会的意義を有するものである。

研究成果の概要（英文）：Although the Kyoto School of Philosophy has been attracting much more attention not only in Japan. but also all over the world, the study of the philosophy of Tanabe, co-founder of this current with Nishida, is still in extremely poor condition, both in terms of its basic research and the translation of his works into foreign languages. So in this research project, I planned to offer a precise elucidation and an integral comprehension of the complicated elaboration and the multifaceted development of Tanabe’s thought to the various communities of philosophical researchers in Japan and abroad (especially French-speaking area). In addition, I finished to translate three texts of Tanabe on Heidegger into French, hoping this will be useful for the extension of the international collaboration I have been constructing with foreign researchers.

研究分野：宗教哲学、現代フランス哲学、京都学派の哲学

キーワード：田辺哲学　京都学派の哲学　種の論理　懺悔道

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、元々現代フランス哲学の専門研究者として活動し、そこから今日における宗教哲学の可能性を探る研究を行っていたが、その中で、学生時代以来その伝統に親しんできた京都学派の哲学の遺産にそうした研究とを連動させる可能性へと目覚めていった。そして、本研究の開始に先立つ数年間、とくにハイデガー哲学の批判的受容という観点から、20 世紀後半以降のフランス哲学と西田や田辺を中心とする京都学派の哲学とをさまざまな観点から交差させ、そこから新たな哲学的考察を引き出すことを目指す研究を積み重ねていった。またその際、研究代表者がフランス哲学研究を通して形成していたフランス語圏を中心とする海外の哲学研究者たちとの国際的なネットワークを活用して、この研究の成果を海外や日本での国際研究集会で意識的に発信していった。その結果、京都学派の哲学の現代西洋哲学への独自な関係性とそれがもつ哲学的なポテンシャルの大きさが、研究代表者の交流する海外の哲学研究者たちに徐々に理解されていき、反響を呼ぶようになった。こうした活動は、その後の海外での京都学派の哲学への関心の急速な高まりへの呼び水となり、ささやかながら一定の貢献を果たしえたと自負している。

ただ、そうした活動を通して、懸案事項も少しずつ見えてきていた。そもそも、京都学派の哲学について、堅固な学術的理解を国内外の研究者の間で共有しつつ、その今日的な哲学的可能性を共に掘り出していこうという作業は、長期的・継続的な共同作業を必要とするものであり、現状はまだその端緒についたばかりでしかない。その中でも、田辺哲学はとくに際立った難解さを有している。西田や九鬼、和辻らの著作は、その表現形態はそれぞれ独特だが、その中核をなす洞察は比較的掴みやすく、海外でも英語圏を中心に概説的紹介や翻訳が積み重ねられている。それに対して、「絶対媒介」を標榜する田辺の思索は、さまざまな文脈の思想を目まぐるしく交錯させた上で、それらを凝縮させ、幾重もの次元の事柄を畳み込んだあまりにも濃密な文章で表現していく。研究代表者は、2012 年に田辺の没後 50 年を記念する『思想』の特集号に関わり、2013 年には、共編者となった日本哲学の仏語アンソロジー（*Philosophie japonaise*, Paris, J.Vrin）で田辺哲学の解説と翻訳を担当した。これらはいずれも相当の反響を呼び、田辺の著作に挑戦する者たちが国内外で出てきたが、今述べたような特質に阻まれて、本格的な田辺哲学研究へと歩を進める者は残念ながらまだそれほど増えていない。西田哲学研究が国内外で大きな盛り上がりを見せているのと比較すると、彼我の差はあまりにも大きいと言わざるをえない。

そうした状況を受けて、研究代表者は、田辺哲学のポテンシャルをさまざまな角度から掘り起こして今日の哲学的思索へとつなげていく作業を継続しつつも、それと並行して、田辺哲学の再評価のための共通の土台となりうるような精密かつ包括的な研究を組織的に提示していかねばならないと考えるに至った。また、それと共に、田辺哲学の正確な理解に基づいた外国語による翻訳を、少しずつでも提供していかねばならないとも考えた。こうしたことが、本研究に着手した段階での動機であり、その背景となった状況である。

２．研究の目的

研究代表者は、「１」で記したような経緯の中で、京都学派の哲学、とりわけ田辺哲学を考察材料とした研究をさまざまな観点から積み重ねてきた。本研究は、この蓄積をもとに、田辺哲学という動いてやまない錯綜体にふさわしい「複眼的」で「動態的」な方法論を練り上げながら、この哲学についての統合的な理解を形成し、提示することを目的としたものである。

「複眼的」とは、田辺哲学を位置づけるべき複数の文脈をつねに同時に視野に収めていくことを意味する。主たる文脈として、(1)西田哲学との相互批判・相互影響を通しての思想形成（京都学派の哲学）、(2)西洋哲学全体の集約的・圧縮的な摂取（哲学史／日本哲学）、(3)同時代の西洋哲学の最前線との対論（現代哲学）、(4)同時代の個別諸学問の成果の摂取とその哲学的・批判的解釈（知の知）、(5)20 世紀の世界史的文脈と共振した「歴史的世界」に面する思索（歴史哲学）の 5 つが挙げられよう。「動態的」とは、これらの文脈が単に並列されるだけでなく、全てが全てと絡み合っていること、またそもそもそれぞれの文脈自体が、田辺の思索がその「外部」と結ぶ、摂取、影響、対決等の交錯した関係を体現していることを踏まえて、田辺哲学を形成する転換媒介のダイナミズムをとらえようとすることを意味する。このように複眼的で動態的な方法論から田辺哲学の全体像に迫ることによって、その哲学的ポテンシャルを、狭く理解された意味での「日本哲学」の枠から解き放った姿で提示したいというのが、本研究に一貫する目論見であった。

３．研究の方法

２の目的を果たすために、まずは必須となる基礎作業として、研究代表者のこれまでの田辺研究において比較的手薄であった時期や論点を取り上げ、それらを時系列順に考察していった。

具体的には、(1)渡独までの「初期習作時代(1910-22)」の諸論考の位置づけ、(2)「種の論理」期の後半に大きな位置を占めてくる「国家的存在論」の批判的検討、(3)第二次大戦末期に着想され、『懺悔道としての哲学』(1946)に結実した「哲学の懺悔道的転回」の形成過程の検討、といった課題である。そうした作業を、テキスト内在的な精密な読解に基づきつつも、ただ個別的に進めるのではなく、上記の複眼的で動態的な方法論を駆使して、その成果が田辺哲学の統合的理解へと反映されるように意を注いだ。

加えて、２の目的を果たす上で不可欠な体制として、本研究においても研究代表者のこれまでの実績を生かして、国際連携体制の下で研究を進めることをその方途とした。とくに留意したのは、日本(語)での研究の積み上げと外国(語)での発信や意見交換とがつねに連動するように研究スケジュールを設定した点である。また、こうした研究様態との密接な連関の下で、田辺の重要テキストの仏訳を計画し、本研究の進展と相乗効果をもたらしうるようなテキストを選んだ上で、研究期間内に翻訳を仕上げることを計画した。

４．研究成果

① 本研究以前にさまざまな形で行ってきた考察を土台として、田辺哲学の統合的理解を形成する年代順の総覧作業をほぼ予定通りに完了することができた。具体的な成果としては、次の諸点を挙げることができる。

(a)「３」で「(1)」として述べた「初期習作時代」について、この時期の田辺の思索が、『善の研究』以来の西田の歩みの圧倒的な影響下にありつつも、最初の論文「措定判断に就いて」においてすでに西田との微妙な強調点のズレが見られること、また、西田による紹介に並走するようにして学んでいった現象学への関わりにおいても、西田にはない独自な方向性を打ち出していることを明確化した〔５「学会発表」(1)〕。この成果は、1930 年から始まり終生続くことになった田辺の激烈な西田批判の背景理解について新たな視点を提供すると共に、西田哲学と田辺哲学の関係そのものをあらためて描き直すことを促した〔５「学会発表」(4)〕。

(b) 「３」で「(2)」として述べた「種の論理」の後半期に至る田辺哲学の転回と変容について、(a)の成果を足掛かりとして、1930 年代前半の世界史的状況を踏まえた、複眼的で動態的な考察を展開することができた。具体的には、そのような状況の下で田辺の「種の論理」構想が応答しようとした問題を浮き彫りにするために、ナチズム台頭期の初期レヴィナスの諸論考（「ヒトラー主義についてのいくつかの考察」(1934)「逃走について」(1935)など）との交差的読解を行った。両者とも、現象学とハイデガー哲学を深く受けとめた上でそれを身体論的存在論の方向へと独自に展開させ、共にフランス社会学派の原始社会論をも取り込みながら、ファシズムの台頭するこの時期の歴史的状況に大きく踏み込んだ思索を形づくろうとしている。こうした面を詳細に検討していくことによって、田辺の種の論理の国家的存在論への変容の所以を理解しつつ、それをより普遍的な問題として批判的に考究することが可能になった。また逆に、田辺の種の論理を介してこの時期からのレヴィナスの思索の歩みを跡づけることで、従来のレヴィナス研究とは異なる仕方で、初期レヴィナスの思索が一貫して追求し続けた問題を浮かび上がらせることができた〔５「論文」(2)、「学会発表」(6)、「図書」(3)〕。

(c) 「３」で「(3)」として述べた田辺哲学の「懺悔道的転回」については、(a)と(ｂ)の成果に加えて、後述する田辺のテキストの仏訳のために行った京大・群馬大の田辺文庫での調査作業を通して、 この転回の「宗教哲学的」意義について踏み込んだ解釈を得ることができた。「懺悔道」以降の田辺哲学は、宗教的語彙を多く用いて自らの思索を再編成しており、「宗教哲学」へと移行したと言われるが、これは単に、それまでの徹底的合理主義を捨てて宗教的境地に立った思索に転じたということではない。むしろ、「哲学ならぬ哲学」と「宗教ならぬ宗教」の交差媒介から成る特異な宗教哲学の道を開いたというべきであり、そこからは、その奇妙な外観にもかかわらず、今日の宗教哲学の可能性を考える上でも大きな示唆を受け取ることができる。これが本研究の解釈の要諦である。この成果は、編者が運営者の一人となる田辺哲学シンポジウムで発表した〔５「学会発表」(8)〕。これをもとにした論考は、研究代表者が編者の一人として準備中の日本語による田辺哲学論集に収録される予定である。

②田辺哲学の統合的理解を構成する①の諸成果は、さらに田辺哲学の枠を超えて、西田哲学や京都学派の哲学全体についての新たな解釈可能性の開示へとつながっていった。具体的には、「哲学の翻訳性」という観点からの日本哲学の解釈学的地位についての考察〔５「学会発表」(2)、「図書」(2)〕、「真理」の問題からの日本哲学の再規定〔５「雑誌論文」(1)、「学会発表」(3)、「図書」(2)〕、「身体性」や「質料性」の問題からの日本哲学の比較哲学的再読〔５「雑誌論文」(3)、「学会発表」(5)(7)、「図書」(4)〕、等である。

③田辺のテキストの仏訳については、途中で訳出テキストを変えたこともあり、予定よりも時間を要したが、田辺による踏み込んだハイデガー批判を含む 1920 年代から 30 年代初めの三つの論文(「現象学に於ける新しき転向」(1924)、「綜合と超越」(1931)、「人間学の立場」(1931))の訳出を完了することができた。今後、細部の点検を行った上で、Hajime Tanabe, Trois études de Heidegger(仮題)としてフランスで出版する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

(1) Yasuhiko Sugimura, «Le lieu de vérités superposées ? Le lieu du néant absolu selon Nishida Kitarô, entre le philosophique et le religieux », *Cités*, n.62, Paris, PUF, 2015, juin, p.89-99、査読なし。

(2) 杉村靖彦「現象学から「社会存在」へ－1934 年の田辺とレヴィナス」、『宗教学研究室紀要』14 号、京都大学文学研究科宗教学専修編、2017 年、3-41 頁、査読有り。

(3) 杉村靖彦「〈自覚〉する身体－西田のメーヌ・ド・ビラン評価から見えてくるもの」、『西田哲学会年報』第 15 号、西田哲学会、2018 年、40－57 頁、査読有り。

〔学会発表〕（計 9 件）

(1) 杉村靖彦「西田哲学を論理的に精密にすることが自分の分である」？－初期田辺の思索をめぐって－」(第三回田辺哲学シンポジウムでの提題、2015 年 8 月 28, 29 日、於福岡大学、本人が企画者の一人となったシンポジウム)

(2) Yasuhiko Sugimura, « Traduire l'Europe. L'enjeu herméneutique de la « philosophie japonaise » »（スリジー＝ラ＝サール国際会議「ジャン・グレーシュ：現象学的理性と解釈学的理性（Jean Greisch：raison phénoménologique et raison herméneutique）での講演、於フランス・スリジー＝ラ＝サール文化センター、2015 年 9 月 5 日、招待講演）

(3) Yasuhiko Sugimura, « Témoignage et Auto-éveil. Deux approches de l'expérience de la vérité pour une philosophie de la religion « post-heideggérienne »（SFRP(フランス語圏宗教哲学会)第二回大会での講演、於モントリオール大学・マギル大学、2015 年 10 月 4 日、招待講演）

(4) Yasuhiko Sugimura, «Nishida et Tanabe. Les deux philosophes fondateurs du néant absolu »（フランス・ブルゴーニュ哲学会での講演、於ブルゴーニュ大学、2017 年 3 月 21 日、招待講演）

(5) 杉村靖彦「〈自覚〉する身体－西田のメーヌ・ド・ビラン評価から見えてくるもの」（西田哲学会シンポジウム「西田哲学とフランス哲学」での提題、於西田記念館、2017 年 7 月 16 日、招待講演）

(6) 杉村靖彦「現象学から「社会存在」へ－1934 年の田辺とレヴィナス」（第 5 回田辺哲学シンポジウム・ワークショップ「種の論理とは何であったのか」での提題、於芝蘭会館別館、2017 年 8 月 27 日、本人が企画者の一人となったシンポジウム）

(7) Yasuhiko Sugimura, «The Self-Awakening (*jikaku*) of Pure Memory –An (Over) interpretation from the Position of Nishida's Philosophy of Absolute Nothingness »（第 9 回 PBJ (Project Bergson in Japan) 国際シンポジウム「『物質と記憶』を再起動する 拡張ベルクソン主義の諸展望」での講演、於京都大学、2017 年 10 月 29 日、本人が企画者の一人となったシンポジウム）

(8) 杉村靖彦「「哲学を懺悔道として親鸞的に考え直す」－懺悔道としての宗教哲学」（第６回田辺哲学シンポジウムでの講演、於福岡大学、2018 年 12 月 8 日、本人が企画者の一人となったシンポジウム）

(9) Yasuhiko Sugimura, « L'École de Kyoto. Pour une autre phénoménologie matérielle du monde », Colloque Internationale de Philosophie: Penser le monde et l'habiter : les phénoménologies à l'oeuvre, Université catholique de Louvain, les 24-26 octobre

2018.(ベルギー、ルーヴァンカトリック大学での講演、2018 年 10 月 26 日)

〔図書〕（計 4 件）

(1) 【共著】Yasuhiko Sugimura, « Traduire l'Europe. L'enjeu herméneutique de la «philosophie japonaise» », in Stefano Bancalari, Jérôme de Gramont, et Jean Leclercq (dir.), *Jean Greisch, les trois âges de la raison*, Paris, Hermann, 2016, p.203-217.

(2) 【共著】Yasuhiko Sugimura, « Témoignage et Auto-éveil. Deux approches de l'expérience de la vérité pour une philosophie de la religion « post-heideggérienne » », Jean Grondin et Garth Green (éd.), *Religion et vérité. La philosophie de la religion à l'âge séculier*, Strasbourg, Presses Universitaires de Strasbourg, 2017, pp.185-191.

(3) 【共編著】Yasuhiko Sugimura, « La « logique de l'espèce » et la question du « social » - Tanabe, Bergson, et l'école française de sociologie », Shin Abiko, Hisashi Fujita, Yasuhiko Sugimura(éds.), *Mécanique et mystique. Sur la quatrième chapitre des* Deux Sources de la morale et de la religion *de Bergson*, Hildesheim/Zürich/New York, OLMS, 2018, p.195-207.

(4)【共著】杉村靖彦「純粋記憶の〈自覚〉―西田幾多郎の絶対無の哲学からの（過剰）解釈」、平井靖史・藤田尚志・安孫子信編　『ベルクソン『物質と記憶』を再起動する　拡張ベルクソン主義の諸展望』、書肆心水、2018 年 12 月、289‐303 頁。

６．研究組織

(1)研究分担者

無し

(2)研究協力者

無し

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。